

ミサが始まる前に私は誰にも自分の十字架があると申し上げました。

たいていの人は自分の十字架をさけて、おろしていきたくて思っています。それは当然のことじゃないかと思えます。十字架を拒んで生きて失敗している人も結構います。もちろん十字架は痛いんです。十字架が好きで負う人はこの世の中にいないと思えます。

しかしイエス様ははっきり言っています。「自分の十字架を負ってついてきてほしい」と。

信仰者である私たち・イエス様が私の救い主と認めているなら、キリストのみ言葉に従わなければなりません。やってもいい、やらなくてもいい、というのではなく、自分に与えられた十字架を負うべきです。しかし痛い。結局十字架をどのような目で見ると、その十字架が重荷になるか、逆に神に近づく、真理に近づく唯一の道になるかきまるんじゃないでしょうか。

私も十字架持っています。苦手です。できるだけ捨てたい。しかし、十字架というものは重くてもおろせる荷物ではありません。さけようとしてもついてきます。

この前、兄のトマス・アキナス金神父が「十字架は負うものではなく、抱きしめるものだ」と言ったのも同じ話だと思えます。結局自分に与えられた十字架をどのような目で見ると、何の意味があるのか、なぜ神様はこのような重い十字架を下さったのか、深刻に落ち着いて考える。それが積極的に十字架を抱きしめる方法じゃないかと思えます。

さあ皆様、ご自分に与えられた十字架について深刻に考えたことあるんでしょうか。

そして、わかった、気がついた十字架を感謝の心でイエス様と一緒に、ひとつの道として受け入れたことはどの位あるんでしょうか。今日の福音にありました。

「あなたの命であろうとも神様にすべて委ねなくてはならない」

ある人にとっては性格が十字架で、すぐ怒る、怒りっぽい。ある人は気が短くてすぐあきらむ。

その性格はたぶん生まれつきか、環境によって作られた、彼の十字架だと……。ある人は激しい荒れた親のもとで育てて性格がゆがんだ。また、貧しかったために物に欲がでる、それもその人の十字架になる。身体的に脊が低い人。子供の時から友達にいじめられた、弱い人。肉体が十字架になるでしょう。いくらがんばってもできない、劣等感につかまっている。

いろんな十字架を私も持っています。たぶん、皆様もそれぞれの痛みを持っているでしょう。

それを避けても、逃げてもそれはそのままあります。そしたらイエス様を受けてください。

ゆるしの方法、それは抱きしめること、そして意味を探します。何の意味があるんでしょうか。

人間は十字架によって苦しまなかったら絶対神様に近づけない。

自分の弱さを徹底的に認めなければ私たちは傲慢になるしかない。へりくだる者がイエスさまを見ます。へりくだる者になるためには何よりも自分の弱さを認めてください。

もしかすると、皆様の家族の一員が一番大きい十字架になっているかもしれません。

できるだけ顔を合わせたくない気持ちがある。ほんとに愛さなければならぬけれど憎んでしまうかもしれません。拒まないでください。拒んでも、もっと大きくして私たちに苦しめるのが悪の勢力です。イエス様は十字架を抱きしめて最後まで行かれました。過ぎてしまうこの世の中の過程の一つとして受け入れれば、もっと軽くなるんじゃないかと思えます。

第一朗読の一節を読んでみましょう。「神のご計画を知りうる者がいるでしょうか」

この十字架の意味、なぜイエス様はこのようにつらさを体験させたのか、私たちにはわかりません。しかし、何かの意味が必ずあります。それを信じるのが私たちの信仰の道ではないでしょうか。

最後に、お母さんの十字架についてお願いがあります。お母さん、妻の一番大きい役割は家族のために祈りを捧げることです。いつも心配しながらなんとかやってきたと思えます。しかし、一番力あ

る方に家族・ご主人・子供達のためにどの位祈りを捧げてきたでしょうか。祈ってください。特にお母さんたち、祈りのある家庭は絶対くずれません。もしくずれても必ず取り戻されます。これが二千年間続いてきたカトリックのひとつの神秘です。あまりにも悪くなっても、その家族は戻ってきます。お母さんたち、妻の祈り、それが家族の中で一番必要であり支えるものです。

ありがとうございました。